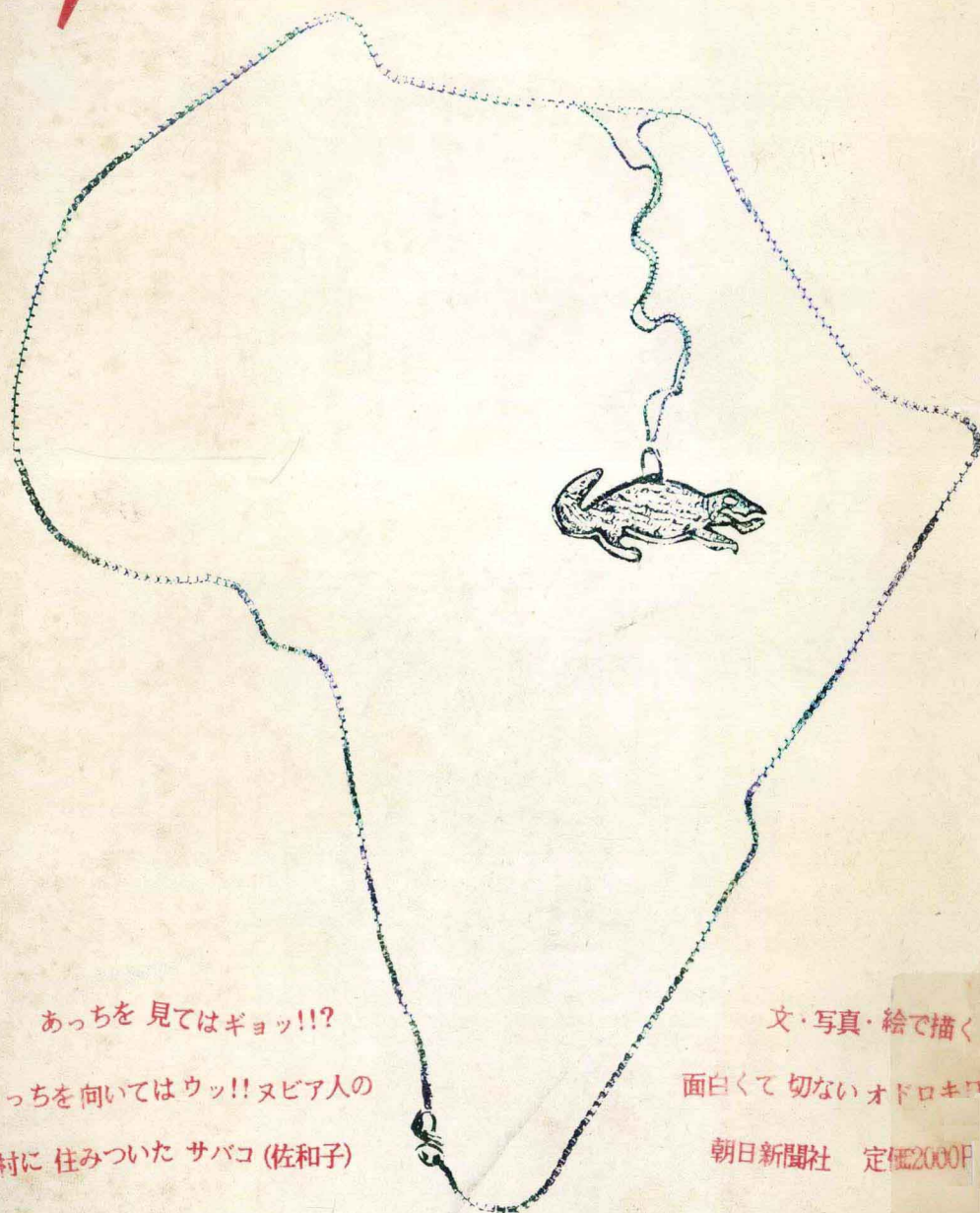


# ナイロのほとりて

合田佐和子



あっちを見てはギョッ!!?

こっちを向いてはウッ!!ヌビア人の

村に 住みついた サバコ (佐和子)

文・写真・絵で描く

面白くて切ないオドロキロ

朝日新聞社 定価2000円

ASWAN

ナイル川

アスワン駅

スーク

市街地

岩窟墳墓群

キツケナ  
アイランド

エレファンティン  
島

ギニア博物館

ナイルメーター

アモン・ホテル

●カタラクト・ホテル

●カラブシャ・ホテル

★わが家

ジャバルタゴウク村

← セントシメオン修道院へ

アガカン 廟



合田佐和子 (ごうだ さわこ)

1940年高知県生まれ。画家。

著書に“Fun with Junk”(CROWN社、1964年)

『ポートレート』(ヘラルド出版、1980年)

『パンドラ』(バルコ出版、1983年)

『銀幕』(版画集 美術出版、1984年)

写真と

P18—19、30—31

42—43、79—78、118—119

122—123、136、161の絵

および見返しの地図

目次カットは著者

他の絵は

ジャババルタゴウク村の

イド・アーメル氏が

描いたもの



ナイルのほとりで

定価2000円

1987年12月5日 第1刷

著者＝合田佐和子

発行者＝八尋舜右

印刷所＝大日本印刷株式会社

発行所＝朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-545-0131(代表)

編集・図書編集室/販売・出版販売部

振替 東京 0-1730

Printed in Japan

©Sawako Goda 1987 ISBN4-02-255789-3 C0026

はじめて空から見た砂漠は、

肌色とうすむらさきに煙る、繊細な葉脈の浮き彫りだった。

のたうつ砂の地図の中で、銀色の蛇のように細く光る一筋のナイル

こっそりと嗅ぎつけた犬のような気分にひたれる一刻を、

私はすばやく胸の奥ふかく吸い込んで、

それからゆっくりと着陸の瞬間を待つ。



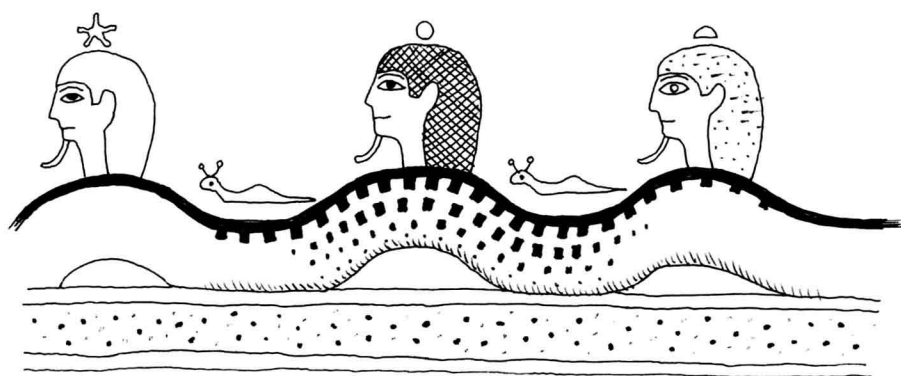
ナイルのほとりて  
目次



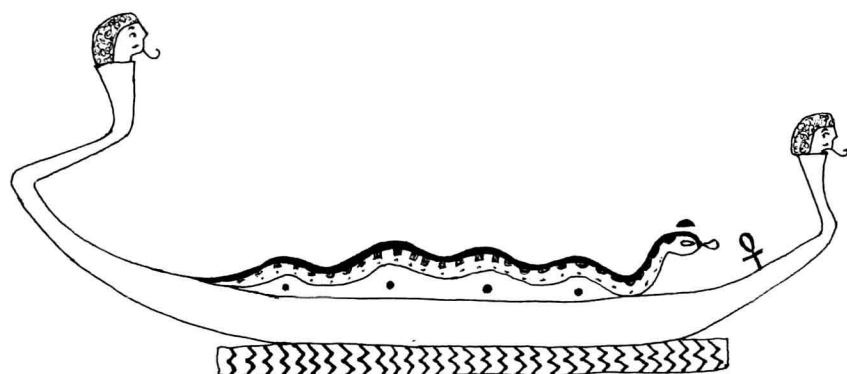
|        |        |     |     |     |          |     |        |       |       |            |    |     |        |
|--------|--------|-----|-----|-----|----------|-----|--------|-------|-------|------------|----|-----|--------|
| 14     | 13     | 12  | 11  | 10  | 9        | 8   | 7      | 6     | 5     | 4          | 3  | 2   | 1      |
| モスコテーク | ハビバースデ | 半月刀 | 犠牲祭 | 晴れ着 | ザズベの家づくり | 結婚式 | ネフェルチチ | ナイルの味 | ファルーカ | ラマダーン(断食月) | 灼熱 | 鏡の中 | ゼロのように |
| 44     | 40     | 37  | 36  | 33  | 32       | 28  | 24     | 21    | 20    | 18         | 16 | 14  | 12     |



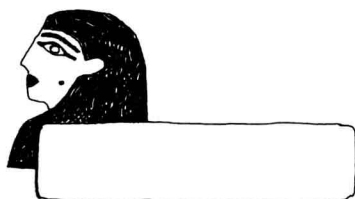
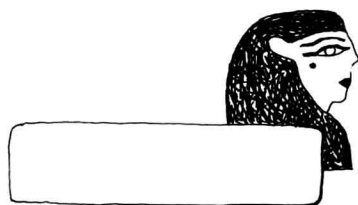
|     |     |      |     |     |     |     |       |       |          |        |       |          |         |        |         |
|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-------|-------|----------|--------|-------|----------|---------|--------|---------|
| 30  | 29  | 28   | 27  | 26  | 25  | 24  | 23    | 22    | 21       | 20     | 19    | 18       | 17      | 16     | 15      |
| 病気  | けんか | たべもの | エイシ | 水がめ | 日の丸 | 逃げ水 | 芸術家の巣 | ラブレター | ミルクをのむワニ | ワニコの脱走 | ワニの動向 | ヤオヤで買った絵 | スーク(市場) | モルト(死) | メンズ・クラブ |
| 120 | 117 | 114  | 112 | 110 | 109 | 107 | 84    | 82    | 71       | 69     | 68    | 64       | 56      | 52     | 48      |



|      |       |      |      |       |       |           |         |          |             |          |        |     |       |     |            |
|------|-------|------|------|-------|-------|-----------|---------|----------|-------------|----------|--------|-----|-------|-----|------------|
| 46   | 45    | 44   | 43   | 42    | 41    | 40        | 39      | 38       | 37          | 36       | 35     | 34  | 33    | 32  | 31         |
| 尋ねねこ | ロバのバカ | 聖ターハ | カケキ鳥 | 奇蹟の小包 | 国際電話局 | マドラサ(小学校) | サーラハの日本 | 水売りゼイダーン | カイローアスワン交響楽 | アブドゥラのひげ | ワタアメ売り | ニセ札 | 二つの権利 | 出産  | ナァナァのおそろしさ |
| 149  | 147   | 146  | 144  | 142   | 140   | 138       | 137     | 136      | 134         | 132      | 131    | 130 | 128   | 126 | 124        |



|                     |     |
|---------------------|-----|
| アリユース(人形).....      | 186 |
| 60 アルシーハ・ディヤップ..... | 180 |
| 59 デイヘッパ.....       | 178 |
| 58 砂嵐の日.....        | 176 |
| 57 遺跡.....          | 174 |
| 56 小石のコレクション.....   | 172 |
| 55 フライバシー.....      | 168 |
| 54 天に星 地に砂.....     | 166 |
| 53 アラビーヤ(車).....    | 164 |
| 52 オンム.....         | 162 |
| 51 ナイル川バトロール隊.....  | 160 |
| 50 スカラベのお煮しめ.....   | 158 |
| 49 アヌビス氏の子孫.....    | 156 |
| 48 小ねずみ二匹.....      | 152 |
| 47 ナイルのトラ.....      | 151 |



アートディレクション  
中林博彦

ナ

イ

ル

の

ほ

と

り

で









## ゼロのように

もの心ついたとき、あたりは一面の焼け野原。世界は焼

け跡だと思いこんで育った。

岩場を流れる水。石ころ。砂。

ギラギラと沈む、まっ赤な夕陽。

散らばる動物の白い骨。溶けた色ガラス。外人部隊。ダ

マスカス。ワニ。ピラミッド。スカラベ（玉押しコガネ虫）。

ターバン。半月刀。月の砂漠……。

好みは、たいてい、こんなものだった。

われに返れば（死ぬほどの暑さを別にすれば）、どうやらおあつらえ向きの、お好みの夢の駅に降り立っているらしい私がいた。いったいどうしてこんなことに？

あれはたしか、一九七八年のことだった。はじめて訪れたエジプトで、最南端の街アスワンにまで足をのばした。

ぬけるような空がどこまでもつづき、ゆるやかに流れるナイル川を、白いファルーカ（帆船）がすべってゆく。

クラブシャ・ホテルから出て、道を渡り、白黒まだらの羊の群れをかきわけ、ファルーカに乗りうると、水辺に下り

る石段のちょっと手前の路地を通りぬけた。なんのへんてつもない、石ころまじりのさびれた砂地を通り、石段に出たとき、とても奇妙な感じがした。

はじめて来たんじゃない！

いつか通ったことのある、というよりも、以前住んでいたことのある、という気分におそわれたのだ。

たしか以前にも、こんなふうな石ころ道を、石につまずきながら通りぬけて、石段の上に出たんだった。石段の向こうには、はてしなくつづく、青い空間があった。

雲の切れ目からちらりと陽が射すように、そんな記憶の一コマが、よぎった。何度来ても同じだった。

なつかしさに胸塞がれるような土地の磁力。この石ころ道と石段に、引き寄せられるようにして、たったそれだけのことで、私は、娘二人を連れて、遠路はるばる来てしまったのだ。なんで、もつと近くに見つけなかったのよ！

三軒茶屋くらいだったらよかったのにねー、と娘たちは嘆息する。

私は今、この石段からはじまる、ジャバルタゴウクという名のヌビア人の村の、角から五軒目に住んでいます。石段へは、ゆっくり歩いてでも一分とかかりません。アスワン



の街のはずれにあるこの村は、アガサ・クリステイの映画「ナイル殺人事件」の舞台にもなった、オールドカタラクト・ホテルの先にあり、ここから南は、ずっと岩山と砂漠がつづいています。アスワン・ハイ・ダムをこえると北回帰線、さらに南下するとアブ・シンベル神殿、そしてその向こうは、スーダンの国境です。

日本人として、何十年も日本に居たのに、いつも居候か下宿人のような気持ちしか持てず、こんな風に、特定の場所にひきつけられたこともなかった私は、やっと、「風と共に去りぬ」のスカレットが、全てを失ったあと、タラによって立ち直ろうとしたことの意味がわかった。ヒースクリフとキャサリンが、亡霊となってまでも、嵐ヶ丘でたわむれていたそのわけも。そして、もしかしたら、とても怖いことだけれど、「女狐」のジェニファー・ジョーンズが飛び込んでしまった、井戸のような所なのかもしれない。この特別な土地の吸引力によって、やっと心やすらかな、念願の囚われ人になった。

ここにいると、時は、楕円形を描いてゆっくりともどつてくる。楕円形は、横たわって眠りにつこうとしている0<sup>ゼロ</sup>のようで、とてもやさしい。



## 鏡の中

チリン、チリン、チリン……。

ガラスの鈴の音が、冷たく透きとおった湖の底から、かすかに響いてくる。澄み渡つてるといいうのに、宙吊りになつて揺れているようなもどかしい響き。

ずっと昔に、どこかで聴いたような……。なつかしいその音を捉えようと、もがいて、目が覚めた。

チリン、チリン……。

階下からきこえてくる、あの音。

天井のすきまから、まぶしい光がななめに射しこんでいる。

そうだ、砂漠の朝だった。

束の間の冷気の漂う、日の出前。

私は、いそいで起き上がり、うつすらと砂のつもった顔を洗い、砂のつもった髪を梳く。

壁にぬりこめられた鏡。

ゆがんで見える。

毎朝ちがう顔の私が映り、私は、しだいに、ほんとうの

自分の顔を忘れてゆく。今日の私は、とてもひたいが広い。あそこの砂地ぐらい、広い。

白いガラベールヤ（ワンビース）に着がえ、口紅をつけて、元気に白い階段をかけ降りる。

「ホウ！ サバコ、サバハルへイル！」

「サバハンヌール！」

土間には、ガラスのコップに、熱くて濃いヌビアン・ティー。ヤギのミルクがそそがれ、お砂糖がいくつも入れられて、そうしてスプーンでかきまぜる。

と、チリン、チリン、チリン……。

あついシャイ（お茶）にたゆたいながら、ガラスとスプーンの触れあう、あのもどかしい、ふしぎな鈴の音が……。

